The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	教会ラテン語のイタリア式発音の実態と発音解説書における問題点
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 11-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85087
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

教会ラテン語のイタリア式発音の実態と発音解説書における問題点

郡 史郎

要旨　教会ラテン語の標準発音であるイタリア式について解説した書籍類の説明は，それだけでは現実の発音を再現できない不十分なものがほとんどで，実際とは異なる内容も書かれている。本稿では標準発音としてのイタリア式の採用の経緯を整理し，1903 年以降の録音録画資料を使っておこなった調査の結果にもとづき実際のイタリア式がどのようなものかを報告する。調査の結果では，ほとんどの解説書が触れない「単語間の音結合」の説明が現実の再現には必要であり，“in excelsis” の下線部はカナ書きすれば［イネ］であって［インエ］ではない。“excelsis” は［エクチェルスィス］が多く，解説書が言う［エクシェルスィス］ではない。mihi は解説書が言う作為的な［ミキ］は一変種として存在するが，特にミサ曲では［ミー］か有声の h 音を使う［ミヒ］が多い。従来の解説書の説明はイタリア風ではあってもイタリア式の実態の説明と言えず，グレゴリオ聖歌の校訂に大きな貢献をした 20 世紀初頭のフランス・ソレム修道院の独特な説明を，実際の発音をよく観察しないまま直接間接に受け売りしたものかと思われる。

1. 研究の背景

ラテン語が使われる場面として現在多いのは歌唱においてである。カトリック教会での典礼として 1960 年代までの標準で，今もときおりおこなわれるトリエント式のミサでの歌唱（グレゴリオ聖歌）もそうだが，特に多いのは音楽としてミサ曲など宗教曲の形になったものを教会外で演奏する場合であろう。そうした場面での「教会ラテン語」の発音は通常のラテン語の教科書・参考書に記されているものとは異なる。本稿で扱うのも主にこれらの場面でのものである。

現在の世界のカトリック教会で典礼に使わる際のラテン語の発音は，おおまかには統一がとれたものと言えるにしても，こまかい点では一様ではなく，地域性を反映した多様なものがある。総本山にあたるローマの教皇庁でも，さまざまな地域の出身者がいるため，聞かれる発音は一様ではない。それは教皇であっても例外ではない[1)]。

標準と考えられるのはイタリア式ともローマ式とも言われる発音で，主に音楽関係者向けにその解説書が数多く出版されている。たとえば典礼文の “Dona nobis pacem.” の最後を [paːʧem]［パーチェム］と読むのがイタリア式の特徴的な発音である。

しかし，イタリア人による発音がイタリア式発音だとするならば，そうした発音解説書の記述には強い違和感を覚える箇所がある。録音が聞けた 1903 年以降のものについて言えば，イ

1) たとえば南ドイツ出身のベネディクトゥス 16 世（在位 2005- 2013 年，1927 年生まれ）の発音は，ecce を [ekʧe] と言い，hoc の h を発音するなど，それまでのイタリア出身の歴代教皇とはすこし異なる，いわゆるドイツ式に近い発音がときに聞かれた。なお，本稿では教皇の呼び方はラテン語名で統一する。

タリア出身の歴代ローマ教皇の発音も，またイタリア人が歌う宗教曲の発音も，そうした発音解説書の記述と異なる点がある。また，解説書間で異なる発音が示されていることもある。そこで本稿では，標準としてのイタリア式発音の採用までの経緯を文献にもとづいて整理した上で，イタリア人による発音の実態はどうなっているかを録音録画資料を用いて検討する。

2. ラテン語発音のさまざま

日本でラテン語の教科書・参考書において発音として示されているのは，その発祥地であるローマの共和制末期から帝政期にかけての時代のものである。たとえば当時の政治家・思想家・雄弁家として知られる Cicero（紀元前 106—43 年）の名を [kikero:][2] つまり［キケロー］と読むもので，ルネサンス期の人文学者エラスムスの 1528 年の著作に始まり[3] 現在も進行中の研究の結果として理論的に再構された古典式と呼ばれる発音である。

しかし，文法も発音も時代とともに変化する。すでに古典期からさまざまな発音があったことが当時の文筆家の記述や文書に反映された綴り方の混乱から知られる（たとえば Traina 1973）。そして，５世紀の西ローマ帝国の崩壊に象徴されるローマの文化的求心力の低下とともに，日常の話しことばとしてのラテン語は旧帝国内の土地ごとに異なる形でどんどん姿を変えてゆき，最終的にそれが現在のイタリア語，フランス語，スペイン語などのロマンス諸語となる。

遅くとも９世紀には元のラテン語は一般大衆には通じないことばになっていた[4]。しかし，ルネサンスの時代にかけて，典礼で使われる以外でも行政，司法，学術，文芸の世界での書きことばとして，限られた人間だけにだが使われ続ける。そしてラテン語を口に出す場合は土地ごとの発音でおこなわれることになる。国際的な交流や外交の場での口頭言語としても使われたようだが，発音の違いが大きいために相互理解に支障を生じる場合もあったようだ[5]。ルネサンス以降は古典期の発音への回帰を目指す人も出たが，全体としては地域差は修正すべきものとはあまり考えられなかった。それどころか，発音を古典期風に変える動きが潰されたエピ

---

2) /a/ 以外の母音の音価は短母音と長母音で少し異なっていたという推定があるが（短母音は長母音より開口度が大きい［=上下に広い］），ここでの表記には反映させないでおく。

3) 用字法の検討や諸言語との比較を通じて，c（後続の母音にかかわらず [k]）や h（摩擦音），母音間の s（無声），二重母音（分ける）などの古典期のラテン語の音価について，多くの点において現代における認識と同じ内容を示している。当時のヨーロッパ各地のラテン語の発音の実態を教えてくれる点でも貴重である。

4) カール大帝の時代の 813 年のトゥール公会議において，話す内容が理解されるように説教は（ロマンス系の）俗語ないしゲルマンのことばにしておこなうことと規定された（Traina 1973, p.31 など）。

5) 16 世紀だが，イングランドのエリザベス女王（在位：1558-1603 年）がポーランド大使と外交案件に関して口頭でラテン語を介してやりとりしたというエピソードも知られる (J. M. Green 2000)。発音の違いについては，前掲のエラスムスの著作の最後に，神聖ローマ皇帝マクシミリアン（皇帝としての在位は 1508- 1519 年）の面前でのヨーロッパ各地出身者によるラテン語のスピーチが，それぞれの出身地や他地域のことば風になまっているか，そのことばで言っているようにしか聞こえなかったというエピソードが記されている。Brittain (1934) はこのほか英語式の発音によるラテン語が相互理解の妨げとなったエピソードをいくつも紹介している。注 10 の最後に記す第 1 回のバチカン公会議でのエピソードも参照。

ソードさえ知られている[6)]。特にフランスでは自国風の発音への自負が強かったようだ。

その後ラテン語の使用は著しく減少したが，発音の地域差は今もあり，現在ヨーロッパの学校で教えるラテン語の発音にも国による違いがあるし，宗教曲の歌唱でも違いが聞かれる[7)]。

3. 教会ラテン語におけるイタリア式発音の公式採用と，そこで生じた問題

典礼のラテン語の発音も国ごとに違うという状況が20世紀の初頭まで続いた[8)]。この状況を変える大きなきっかけを作ったのが教皇ピウス10世（在位1903-14年，1858年生まれ）である。

同教皇は1903年の自発教令(motu proprio)において典礼における音楽のありかたの指示を出し[9)]，1912年にはフランス・ブルジュのドュブワ大司教への書簡で，典礼で使うグレゴリオ聖歌のラテン語の発音として歴史的にふさわしいとして，ローマで使われているものを推奨し(最初“celle qui est usitée à Rome”「ローマで使われているもの」と言い，後で“prononciation romaine”「ローマの発音」と言い換えている），それをフランス全土に広めるよう要請した[10)]。さらに1928年，

---

6) Traina (1973, p.34) と Brittain (1934, p.33) には16世紀にエラスムス式の発音への変更をめざしたイングランドやフランスでの試みが潰されたエピソードが紹介されている（Brittain にはフランスの例なし）。Traina によれば，これには宗教改革の渦中にあったことも関係するらしい。政治的にデリケートな問題と感じられたのだろう。また，権威への挑戦と受け取られた面もあるのだろう。

7) 現在イタリアでは高校でラテン語が教えられている。教科書では教会式（pronuncia ecclesiastica=イタリア式）と古典式（pronuncia classica）の２種の発音があることが紹介されるが，そのことへの言及は最初だけで，あとの説明はひたすらイタリア式の発音を使っておこなわれると言ってよい。いずれにしても発音の説明はごく簡単に済まされるだけである。フランスでは，高校で教えられる発音は1950年代までは伝統的なフランス式だったようだが，現在は古典式（http://j.poitou.free.fr/pro/html/ltn/latin.html）。ただ，学習者は少ないようだ。ドイツでは現在ラテン語の授業で教えられる発音は，伝統的なドイツ式を古典式に加えた折衷的な発音のようである（たとえば https://www.planet-schule.de/wissenspool/das-roemer-experiment/inhalt/unterricht-latein/zur-aussprache-des-lateinischen-kommentar-textes.html）。歌唱では伝統的なドイツ式やその変種が一定の勢力をもつが，全体としてイタリア式であっても Abrahæ を［アブラエ］ではなく［アブラヘ］のように歌う歌手もいる。

8) 理論的に再構された「古典式」の発音についてはおよそ全世界共通の認識があるため統一はとりやすいだろう。しかし，信教がローマ帝国で自由化され，ラテン語圏での典礼がもともとのギリシア語ではなくラテン語でおこなわれるようになったのは4世紀なので（http://www.vatican.va/news_services/liturgy/details/ns_lit_doc_20091117_lingua-latina_it.html），典礼で使われるラテン語の文章を，それらが作られ使われはじめる以前の「古典式」の発音で読むのはおかしいことになる。

9) http://www.vatican.va/archive/ass/documents/ASS-36-1903-4-ocr.pdf（p.329ff: 原文はイタリア語とラテン語）

10) http://www.vatican.va/archive/aas/documents/AAS-04-1912-ocr.pdf（p.577f: フランス語）。ただ，F. Brittain (1955［２版］p.40)によれば，この手紙はドュブワ大司教自身や他のイタリア式発音推進をめざす人々の提案にもとづいて書かれたものと当時理解されていたようだ。しかし，要請の背景には，第１回バチカン公会議（1869-70年）からカトリック教会内で教皇への権力集中の流れが強まったこと，そして，教皇庁と一線を画そうとする傾向が強かったフランスの教会でおこなわれていたラテン語発音は韻律面も含めて崩れ方が大きく，聖歌の歌唱にふさわしいと思われず，また実際に耳からだけでは何を言っているのか理解しにくいものだったであろうこと，そして19世紀末からグレゴリオ聖歌の校訂を進めていたフランスのソレム修道院がみずからの歌唱にイタリア風の発音を採用し（1904年のソレム式の演奏について注12参照），1910年にはそれにもとづく発音解説書が出ていたこと（C. Couillault “La réforme de la prononciation latine”：未見だがソレムの聖歌校

その２代後のピウス 11 世（在位 1922-39 年，1857 年生まれ）も，それが他国でも採用されるようにとの要望を記した書簡を同大司教に送っている[11)]。

しかし，どちらの書簡でもそれが具体的にどのような発音かの説明はなされていない。ただ，ドュブワ大司教は枢機卿となってパリに転じていた 1922 年に，ピウス 10 世の要請を実現すべく，みずからの教区の関係者への指示の書簡という形で文書を出版し (Dubois 1922)，そこでローマの発音を使うよう命じ，その付録として文字と読み方の対応表を語例とともにつけている。

その内容は，後述する h と xce の読みの特異性も含め，19 世紀末からグレゴリオ聖歌の校訂を進めていたフランスのソレム修道院が編集した聖歌集，通称 “Liber Usualis”(イタリア式でカナ書きすれば「リベ ルズアーリス」）の 1920 年のフランス語版にある発音解説とほぼ同じである。文書にソレム修道院への言及もあることから，その発音解説を借りてきたものと考えられる[12)]。

一方, “Liber Usualis” ではピウス 10 世が勧めるローマのものとして発音が説明されている[13)]。しかし，この発音解説には h と xce の読みが特異という問題があり，イタリア風ではあっても厳密にはローマなどイタリアの実態とは異なる独自の「ソレム修道院式」と言うべき発音になっている。また，あいまいで真意がわからない説明もある。

“Liber Usualis” はバチカン公式の聖歌集ではない。しかし，公式版の編纂にもソレム修道院があたったことや上記のような経緯があったため，公式版にはないソレム修道院の解説が正しく権威あるものと考える人が，ドュブワ大司教自身を含めイタリアの発音の正確な実態にくわしくない人には多かったであろう[14)]。主に音楽関係者向けに宗教曲のラテン語をどのように発

訂の中心人物のひとりポチエ師が序文を書いているようだ）があると思われる。ピウス 10 世の要請がフランス語での書簡の形をとり，官報である使徒座公報に残したのも，多くのフランス人の目に入りやすくするためだろう。この要請に対してフランス国内では反発が 1929 年まで続いたが，最終的には全国の教会で採用された (Marouzeau 1943, p. 18)。なお，当時のフランス式の発音をよそ者が理解することのむずかしさについては，ラテン語でおこなわれた第 1 回バチカン公会議で，ある熱心な教皇派のフランス人司教の発言中にイタリア人司教から理解できないとの声があがったが，それに対しそのフランス人司教は “Gallus sum, et Gallice loquor.” (自分はフランス人であり，フランス風にしゃべっている）と，ゆっくり，精一杯のイタリア式発音を使って返したとのエピソードが，G. Buttler (1930) の著書を引用する形で Brittain (1934: p.26) に記されている。

11) C. Eichenseer (1963, p.3) にラテン文が，G. Suñol (1930, p.205f) に英語訳がある。

12) “Liber Usualis” の初版は 1896 年だが発音解説はない。1920 年版と同じ発音解説がソレム修道院の聖歌校訂の中心人物のひとりモクロ師の著書 (Mocquereau 1927) にあり，それは同修道院の “L’exacte prononciation romaine du chant grégorien basée sur les principes de l'émission vocale” という出版物をもとにしているとあるが (p.68)，出版年不明（未見）。同書では 1910 年以降刊行の他の 5 点の解説書も紹介されているが，いずれも未見。しかし，モクロ師自身の指揮による 1904 年の聖歌歌唱はその発音どおりのようなので，それ以前，おそらく 1896 年には同修道院の発音は定まっていたと思われる。演奏は以下の WEB ページで聞け，録音経緯も知ることができる。http://gregorian-chant.ning.com/group/enregistrements/forum/topics/le-congres-gregorien-de-1904

13) 1934 年以降の英語版には “the living liturgical Latin of the Church”「現行の教会ラテン語」の発音ともある。

14) ピウス 10 世・11 世もイタリア式を推奨するにあたってソレム修道院の発音のことは当然念頭にあっただろうが，どこまでこまかくその内容を把握していたかはわからない。確実なのは，上述の書簡では「ローマで使われているもの」を推奨したのであって，ソレム式を推奨するとは言っていない。

音すればよいかを解説した書籍や文書が日本語も含め数多く出ているが，そのほとんどは h と xce についてソレム式で説明しており，ソレム式を直接間接に受けついだものになっている。

実態ということでは，ピウス 10 世自身の発音は聞けていないが，同教皇はイタリア半島北部の出身であり，北部風のイタリア語の発音をラテン語に反映させたものであったろう。ピウス 11 世も北部出身だが，同教皇を含め，ピウス 10 世と世代が近いピウス 12 世（在位 1939-1958 年，1876 年生，ローマ出身），ヨアンネス 23 世（在位 1958-1963 年，1881 年生，北部出身）が残したラテン語の録音を聞いても，それぞれの出身地のイタリア語の発音傾向を反映したものになっている（[s] の二重子音と [ʃ] の長さ，母音間の s が有声か無声か：音源は稿末に示す）。したがって，ピウス 10 世や 11 世が言う「ローマの発音」というのは，ローマの町に限られた発音ということではなく，教皇（1523 年から 1978 年までずっとイタリア出身）がいるローマの教皇庁を中心に，イタリア各地で多少の変種を包括しつつおこなわれていた発音を指すと考えるのが妥当であろう。当時は政治的にイタリア王国と対立していたために「イタリアの発音」と言わなかったのかもしれないが，以下ではこれを指して「イタリア式」と呼ぶことにする。ミサ曲は典礼文に音楽をつけたものなので，その演奏においても発音はイタリア式が標準になると思われる[15)]。

20 世紀にはイタリア的な発音の普及が進んだ。Brittain (1934) は主に英国におけるラテン語発音のありかたの変遷を記した著書の冒頭で，イタリア式がヨーロッパ大陸でもイギリスでも盛んになりつつあると言い，その背景のひとつとしてラジオ放送という要因をあげている[16)]。

4. イタリア風の発音を解説した書籍類の説明内容と問題点

上述の自発教令以降に主に音楽関係者向けに刊行された発音解説の書籍や文書類のうち，今回参照できたのは，英語によるものが 9，フランス語とドイツ語が各 1，日本語 7 である（まったく同内容のものはのぞく：稿末に一覧を示す）。このうち，ドイツ語の V. Scherr (2010) は歌手や合唱指導者等へのインタビューと実態観察にもとづく研究書という性格が強いため別扱いする。

これらの書籍類で古典式の発音との違いが問題となる箇所について見ると，説明がほぼ共通している点と異なる扱いが目だつ点がある。また，どれにも触れられていないことがらもあるし，説明がほぼ共通しても正確性に疑念が持たれる箇所もある。

解説書類でほぼ共通と言えるのは，文字 æ (ae)，c，ch，g，gn，h，œ (oe)，ph，qu，sc＋母音字，th，ti＋母音字，v，xce，y，そして二重子音の音価の説明である[17)]。

---

15) ただし，バッハ，ベートーベン，シューベルトなどドイツ語圏だけで活動した作曲家のラテン語の宗教曲を演奏する場合は，作曲家自身がイメージしたであろうドイツ式発音を使うのがよいという考え方もある。

16) Radio Vaticana（バチカン放送）の開局が 1931 年 2 月で，開局当日にグッリェルモ・マルコーニのあいさつに続いて教皇ピウス 11 世がラテン語によるメッセージを世界に向けて流した。同局の番組にはラテン語によるものがあり(http://www.memoriafidei.va/content/dam/memoriafidei/documenti/Cocco%20-%20Relazione.pdf)，Brittain の説明はそれらがイタリア以外にも一定数の聴取者を持っていたことを示すのではないかと思われる。同年 11 月には Radio Trieste がミサ（当時はラテン語）の放送を始めている(https://www.treccani.it/enciclopedia/voci-e-immagini-della-fede-radio-e-tv_%28Cristiani-d%27Italia%29/)。

17) æ は [e]，c は [k] または [ʧ]（後続母音が a, o, u か i, e かで決まる），ch は [k]，g は [g] または [ʤ]（後続母

そして，問題があると感じられる箇所は以下のとおりである。なお多くの解説では国際音声記号は使われていないが，以下では主にその形に直して [] 内に示し，必要に応じてカナを使う。

(1) どの解説も文字や単語をどう読むかを説明しているだけで，句や文としてどう発音するかにまったく触れられていない点。特に単語間の音結合現象の無視。

(2) 文字 h について，ほとんどの解説書類は mihi（私に）と nihil（何も［何でも］ないこと）の２語を例外としてその他は無音とするが，疑義があるのはこの２語の h を [k] で発音させる点。

(3) ほとんどの書籍類で xce を [kʃe] と発音させる点（たとえば excelsis を［エクシェルシス］）。

(4) 単語の内部で母音にはさまれた s と x の発音。

(5) 母音字 e と o の発音が広いか狭いか。

(6) その他。

以下，問題点を個別に説明し，５節でそれらについて録音録画資料で検討した実態を示す。

4.1 句や文としての発音，特に「単語間の音結合」の無視

重要性が高いと思われるのが，たとえば聖歌 Gloria の “Gloria in excelsis Deo”，Credo の “Pater omnípotens”, “et terræ”, Dies irae の “Et ab haedis” の下線部をどう読むかという問題である。

Scherr (2010) 以外，句や文の中で単語がつづくときの発音にはまったく触れられていないが，単語と単語のあいだに生じうる２種類の音結合現象のことを考える必要がある。

そのひとつは，ここで「**単語間の子母音結合**（しぼいん）」と称する現象である。たとえば，英語で “Good afternoon.” は Goo dafternoon，つまり［グダフタヌーン］であるかのように言うのがふつうであり，“in an instant” (一瞬で）なら，i na ninstant，つまり［イナニンスタント］のように言うことが多い。英語では「リンキング (linking)」と呼ばれる音結合の一種だが，フランス語では「アンシェヌマン (enchaînement)」と呼ばれる。

イタリア語では単語間で子母音結合をさせるのが当然になっているので，たとえば “Buon appetito.”（食事開始時のあいさつ）や “con un amico”（男の友だちといっしょに）は，ていねいに１語ずつ切りながら言いたい特別な事情がないかぎり［ブオンアッペティート］ではなく buo nappetito［ブオナッペティート］，そして［コンウンアミーコ］ではなく co nu namico［コヌナミーコ］と言う。つながずに各単語を別々に言うと，ふつうの自然な発音ではなくなる。

この傾向を強く持つイタリア人が発音するラテン語にも同じことが生じやすいと思われる。つまり，上述の例で下線部をカナ書きすれば “Gloria in excelsis［イネ］Deo”, “Pater omnípotens［テロ］”，“Et ab haedis［エタベー］” になると思われ，そのように発音しないとイタリア式発音

音が a, o, u か i, e かで決まる），gn は [ɲ]，h については後述，œ は [e]，ph は [f]，qu は [kw]，sc＋母音字は [sk] または [ʃ]（後続母音が a, o, u か i, e かで決まる），th は [t]，ti＋母音字は [tsi]，v は [v]，xce については後述，y は [i]。イタリア語の読み方とは違う点がある。特徴的な違いは「ti＋母音字」の発音で，イタリア語なら tieni「動詞 tenere（保つ）の現在・２人称単数形」は [tjɛːni]，questione「問題」は [qwestjoːne] のように ti の部分は [tj] で言うのに対し（一部の地名に例外あり），イタリア式のラテン語発音では gratia を [gratsia]，Pontio Pilato を [pontsiopilaːto] のように [tsi] で言う点。母音の e と o の発音の開閉にも違いがある（後述）。

とは言えないのではないかと思う[18]。これは特に歌唱において大きな問題になると考えられる。

単語間の子母音結合はフランス語でも当然のことなので，諸解説書の大本と言えそうなフランス語版の“Liber Usualis”の発音解説でもわざわざ注意を喚起する必要を感じなかったのであろう。なお，ドイツ語では単語間で子母音が結合することはすくない。英語は中間的である。

もうひとつは「**単語間で同じ調音点・調音法を使う子音が続くときの二重子音化**」で，たとえば Credo の “et terræ”, “ad dexteram”, “descendit de (cælis)” は途中で言い直さず［エッテッレ］［アッデクステラム］［デシェンディッデ］と，日本語で言えば促音を入れる発音になるだろう。

ただ，上にあげた例は「に＋高いところ」という前置詞＋名詞（的な形容詞の用法）の結合，「父＋全能の」という名詞＋形容詞の結合，「そして＋地の」「そして＋ヤギたち＋から」という並列の接続詞とそれに続く語や語群の結合など文法的な結びつきが強い単語連続で，その間に休止を置きにくい箇所であろう。では，結びつきが強くない単語連続，たとえば “pax hominibus”（平和が＋人々に）は［パクソ］のようにつなげるか，それとも［パクスオ］のように言うだろうか。イタリア語で語末に子音があるのは冠詞，前置詞，一部の形容詞だけということもあって（外来語をのぞきラテン語からの変化過程で消失），これがラテン語発音でどうなるかは自明ではない。典礼やミサ曲等の演奏で実際にどう発音されているかは５節で報告する。

4.2 mihi と nihil の h の発音

ソレム修道院編の “Liber Usualis” の 1920 年フランス語版は，この２語について “autrefois écrits *michi* et *nichil*”「古くは michi, nichil と書かれた」という補足とともに miki, nikil と発音するよう指示している (p. xviij)。同書の 1934 年の最初の英語版では補足は “In ancient books these words are often written *nichil* and *michi*”「古い書物ではよく michi, nichil と書かれていた」となっている（p. xxxviij，ほぼ最終版である 1961 年版も）。同修道院の 1930 年の聖歌録音でも [k] 音を使って歌われている[19]。他の発音解説書類でも同様の補足をつけての説明がされているが，「古くは書かれた」「古い書物では」が [k] 音の正統性の根拠のように書かれているわけである。

しかしそこには問題がある。たしかに中世からルネサンス期にかけて michi, nichil と書かれていたことがよくあった。しかし，その時代でも本来の形である mihi, nihil は使われていたし，nihil は 1570 年版以降の公式典礼書でも，ch どころか h もない nil の形でも書かれていることがある点にまず注意しなければならない（「レクイエム」の Sequentia に出てくる）。

この２語に ch の綴りを使うことに対してはルネサンス期の人文主義の時代に強い批判があったことが知られる[20]。そして 16 世紀にはこの書き方は廃れてゆく。トリエント公会議によ

---

18) 音声学者の A. Camilli (1909) は，語末の子音が母音で始まる語にポーズなしで続く場合は通常「強化」（= 二重子音化）されると言う。それにしたがえば，それぞれ［インネ］［テッロ］［エッタッベー］となる。ただし，もし Camilli の言うとおりなら“ad hoc”も同様のはずだが，２種類あるイタリア語の発音辞典（http://www.dizionario.rai.it と http://www.dipionline.it）ではどちらも [adɔk] で，二重子音化させていない。

19) CD “Gregorian Chant Rediscovered” (Solesmes S.835, Creative Joys - Paraclete Press, 1995), Track 18, 21。

20) この問題に関する人文主義の時代の諸家の説が R. Sabbadini (1885, p.100f)に紹介されている。

る典礼改革を受けて出た 1570 年版やそれ以降の公式典礼書 “Missale Romanum” でも michi, nichil の形は使われていない[21]。R. Sabbadini (1922, p.7) は，michi, nichil は中世の特殊な発音が「前」人文主義の時代に引き継がれたものだが，氏の著作当時の（イタリアの）学校でもまだなくなってはいない (non ancora scomparsa) と言う。しかし，それは言い換えれば，[k] 音を使うのは 20 世紀初期のイタリアの主流の発音ではなかったということであろう[22]。

h はすでに古典期においても無音化傾向が強かったようで（たとえば S. Allen 1978, p.43f），中世には基本的に無音だったと思われる。そうした状況下で，複合語以外で語中で母音字にはさまれた h の字を持つ少数の語のうち（典礼文では多くないが）頻用語である mihi, nihil については，h が無音だと語内に母音連続が生じ，さらには 1 音節に発音されてしまいやすい。これは音節数を重視する詩の読みにおいて特に大きな問題になるので，それを避けるために発音上または単なる文字上の工夫をしたであろうということは考えやすいところである。

そして，もし ch の綴りを使うのが発音上の工夫だったとしても，それが無声の破裂音 [k] をあらわそうとしたものだとはかぎらない。むしろ [k] の突然の登場は異様である。[h] かそれに近い音をあらわそうと何とか工夫したのが (同綴異音が生じてしまうが) ch の綴りだったという方が考えやすい。Allen (1978, p.45)は，後期ギリシア語の発音として当時なじみのあった [ç] 音（同書では「ドイツ語の ich の子音」と表現：［ヒ］の子音）だろうとしている。一方，イタリアでラテン語研究入門書として有名な Traina et al. (1998, p.56f) は ch の使用を純粋に文字上の工夫と考え，michi, nichil は過剰修正で，正しい発音は確実にどの時代も mī, nīl だったとまで言っている。

4.3 exce の発音

“Liber Usualis” は 1920 年のフランス語版でも 1934 年の英語版でも “in excelsis”（［天の］高いところに）の excelsis を [ekʃelsis]［エクシェルスィス］と読ませる。他の多くの発音解説書も同様である。しかし，イタリア人のどれほどがわざわざそんな読み方をするだろうか[23]。この綴り

---

21) https://archive.org/details/messale-tridentino-di-san-pio-v-1570。このトリエント公会議以前のたとえば 1474 年版では michi, nichil (https://archive.org/details/missaleromanumm01churgoog)。

22) Camilli (1909) は mihi, nihil は [k] 音としているから，それが正しいと考える研究者が 20 世紀初頭にいたのも確かである。

23) イタリア語の発音辞典にいくつかのラテン語についてイタリア語としての発音が記されているが(URL は注 18 参照)，exce を含む語は基本［エクスチェ...］であり［エクシェ...］はない（Excelsior, excerptum など）。

三ヶ尻正氏 (2011, p.112f) は excelsis のイタリア式発音に［エクスチェルスィス］［エクシェルスィス］［エクセルスィス］の 3 通りがあるとした上で，Scherr (2010) が［エクスチェルスィス］がベストと言っているとしながらも「日本人が歌うなら（中略）［エクシェルスィス］が分かりやすいのではないでしょうか」と言い，実際のイタリア人もそれが多いようだとしている。しかし，実際のイタリア人についての説明は事実ではないし（後述），どれも同様に良いならともかく，発音者にとってのわかりやすさという基準で外国語の発音を決めるのはおかしい。むしろ，わかりやすさなら［エクスチェルスィス］が一番である。なお，三ヶ尻氏の著書は日本語による解説としてもっとも情報が豊富だが，「純イタリア式」なる発音については事実誤認がある。それはむしろ「無教養イタリア読み」とでも言うべきものである。同氏は eleison を［エレイゾン］，gli を「［ʎィ］(舌の側面の摩擦音)」とするのがそれだとしているが (p.111)，eleison はそう言う司祭もたしかにいるが，

の中世発音についての情報は私は持たないが，語源から言えば使用頻度の高い接頭辞の ex- が celsis についたものなので，きちんと言えば [eksʧelsis][エクスチェルスィス]となるはずである。

ただ，それだと xc の部分で「破裂＋摩擦」という調音動作を２回繰り返すことになり，すこし発音しにくいということはあるだろう。ソレム式の [ekʃelsis]［エクシェルスィス］はそれを１回に省略してしまった言いそこない的な発音なのかもしれない。あるいは，イタリア中部の地域性としてイタリア語の [ʧ] を [ʃ] と言う傾向があるので（pace［パーチェ］を［パーシェ］など），ソレム修道院が頼りにしたイタリア人助言者がそれをここにあてはめて [eksʃelsis] と言い，それが [ekʃelsis] と聞かれた，あるいは子音連続を回避するために [s] を省略して [ekʧelsis] と言おうとしたものが結果的に [ekʃelsis] になったというような可能性も考えられる。

ほとんどの解説書類がソレム式を示す中で，1890 年生まれイタリア中部出身で，ローマで典礼音楽を学んだ聖職者・音楽家 C. Rossini による聖歌集 (1933, p.iii)では excelsis の発音を "*eks-chél-sis* (not *ek-shél-sis*!)"，つまり［エクスチェルスィス］だと強調している点が注目される[24)]。［エクシェルスィス］はおかしいと言っているわけである。1904 年の「グレゴリオ聖歌会議」でのバチカンのレッラ神父指揮による Roman Schola の聖歌録音では，音質はよくないが [ekʧelsis] または [ettʃelsis]［エクチェ～エッチェ...］に聞こえる[25)]。先述のピウス 10 世が勧める「ローマで使われている発音」ならどうやら［エクシェルスィス］ではなさそうだ。なまったような [ekʃe]［エクシェ...］をソレムがなぜわざわざ規範としたのか，理由は現時点ではわからない。

4.4 単語の内部で母音にはさまれた s と x の発音

s については，Iesus（イエス）や miserere（あわれみたまえ）を [je:sus]［イェースス］，[misere:re]［ミセレーレ］，つまり無声音の [s] で言うか，あるいは [je:zus]［イェーズス］，[mizere:re]［ミゼレーレ］，つまり有声音の [z] で言うかの問題である。これについての解説書類の説明は，[s] 説，[z] 説，そしてその中間という３説に分かれる。この不統一のもともとの原因は，"Liber Usualis" の解説が感覚的な書き方になっていて，わかりにくいからではないかと思う。

ふつうは［エレイソン］だし，negligere, anaglifo, glicerina, glissando のようなラテン語，ギリシア語由来の gli を持つ語ではイタリア語でも [gli] であり [ʎi] と言わない。特に語頭の gli は代名詞と少数の固有名詞以外すべて [gli] だし，そもそも [ʎ] は摩擦音ではない。イタリア式として非標準的な現象については 5.2.6 節で述べる。

三ヶ尻氏が引く Scherr の著書は声楽家や指導者等へのインタビューや実態観察にもとづくものだが，2010 年版 p. 88 では exce/exci に４種類の発音があるとし，その中で [ksʧ]，つまり excelsis なら［エクスチェルスィス］という発音について，"Diese gilt als korrekteste und erstrebenswert für gute Lautung."「これがいちばん正しいとされ，良い発音をするためにがんばって使う価値がある」とする。そして，[kʧ] つまり［エクチェルスィス］は "etwas einfacher und akzeptabel"「先のものより簡単で容認される」としている。しかし三ヶ尻氏が推す [kʃ] つまり［エクシェルスィス］は「英米の手引き書ではこれが正しいとよく書かれているが推奨できず，イタリア人はそれを不注意な発音か，良くて方言的と思うだけ」（原文省略）としている。[tʧ]［エッチェルスィス］は「強くイタリア語化した形で，無頓着で無教養なものなので芸術的歌唱においては避けられる」としている。

24) 経歴は以下の WEB ページによる。https://www.cpdl.org/wiki/index.php?title=Carlo_Rossini&oldid=1040284

25) 注 12 に記した WEB ページにある Direction Mgr Antonio Rella の音源 03, 09。

その 1934 年の英語版では母音間では「わずかにやわらげる (slightly softened)」とあるだけだが，1920 年のフランス語版では，「母音間ではごく軽くやわらげるが (très légèrment s'adoucit)，z の音までにはけっしてならない」とある。この z はラテン語の字を指していると考えるのが妥当だと思うが，z の項を見ると Zizania の語例つきで「ds と発音する」とある。語頭に立つ子音として [ds] は自然ではないので，おそらく文字 z は破擦音 [ʤ] になることを言いたいのだろう。すると s の項で母音間では z にしないというのは，破擦音にしないということを言いたいのではないかと思う。したがって，z にしないでごく軽くやわらげるという説明は，破擦音にせずに有声化させること，つまり母音間の s は [z]（［イェーズス］［ミゼレーレ］）と発音すると言いたいのだろうと私は理解する。実際，1904 年にソレム修道院のモクロ師が弟子たちを指揮した聖歌録音でも resurrexit, posuisti の s は [z] に聞こえるし[26]，同じ場でのバチカンのレッラ神父指揮による Roman Schola の録音も母音間の s は [z] に聞こえる[27]。言語学者の Traina (1973, p.64) も母音間の s は有声だとしている。しかし音声学者の Camilli (1909) はイタリア語と同じとしているので，単語による使い分けがあると言っているのだろう。

音声の専門的知識をもたず実際の発音もよく知らない人が "Liber Usualis" などのあいまいな説明を見たとき，母音間の s は [z] でないと思っても不思議はなく，[s] と [z] の中間だと思ってもしかたがない。[s][z] の中間だという考え方が典型的に書かれているのが，日本の『すぐに役立つ合唱ハンドブック』における金澤正剛氏の解説で (p. 123)，単語内の母音間の *s* について「無声のするどい摩擦音 [s] でもなく，また有声の [z] でもなく，[s] がその前後の母音の影響をうけて同化作用をおこし，わずかながら有声化して [z] に近くなった音」とある。しかし，この「わずかながら有声化して [z] に近くなった音」はどのようにすれば発音できるのだろうか。

ローマ近辺のイタリア語で，母音間の s が無声にも有声にも聞こえる音になりうることは私も調査の場で経験したことがあるが[28]，ほとんどの場合はどちらかはっきりしている。

そもそも，有声化させるには基本的には声帯を振動させる必要がある。声帯は振動するかしないかのどちらかで，その中間はない。声帯を振動させながら「わずかながら有声化」させるとすれば，声帯の振動の大きさを抑えるように呼気を調節するか声門を開きぎみにするか，[s] の摩擦の途中から振動を始めるかということになろうか（歌なので特定の高さの音を出さないといけないから，s の部分だけ声帯の振動回数—声の高さに比例する—を少なくすることはできない）。無意識でそうなってしまう一部のイタリア語母語話者は別として，歌唱の中でそういうことを意識的にできる人がいったいどれほどいるだろうか。金澤氏のものは，どうすればできるのかわからない発音を指示するという，困った解説になっている。同氏は「現在ローマ教皇庁の公認している読み方を採用した」としながらも典拠は示していないので何を指すのかわからないが，私

---

26) 注 25 と同じ WEB ページにある Direction Dom Mocquereau の音源 07 (Resurrexi)。

27) 同ページの Direction Mgr Antonio Rella 03, 07 等。

28) この背景には，一般にイタリア語では s が無声か有声かの使い分けはあるものの，その違いは少数の例外をのぞけば意味の違いには結びつかないので，はっきりどちらかにしなくても困らないという事情がある。

見では氏の記述も結局は“Liber Usualis”のあいまいな記述に由来する誤解であろう。

x については，母音間での発音の説明は s 以上の混乱状態にある。crucifixus や resurrexit などの x をどう言うかの問題だが，これには無声の [ks] 説，有声の [gz] 説，その中間説，そして前半だけ有声という [gs] 説がある。“Liber Usualis” の 1920 年フランス語版には説明はなく，1934 年英語版には母音間では「わずかにやわらげる (slightly softened)」とのみ書かれている。

4.5 母音字 e と o の発音（広いか狭いか）

母音字 e と o は，口の上下の開き方が相対的に広い発音 [ɛ] [ɔ] と相対的に狭い発音 [e] [o] の使い分けがイタリア語にもフランス語にもドイツ語にもある。古典期のラテン語では短い e, o は相対的に広く，長い母音は相対的に狭かったという有力な説がある。広狭の使い分けは英語にも日本語にもないので，現代の外国語を学ぶときも日本では詳しい説明はなされないか，説明されても使い分けできるようにするための訓練はしっかりなされないのがふつうであろう。

教会ラテン語の e o にも広狭の使い分けはあるだろうか。“Liber Usualis” の説明はやはりあいまいである。1920 年のフランス語版では「（フランス語の）nef, mets, mot のように中程度に口を開いた (médiocrement ouvert)」音としている。しかし例にあがっている語の発音は辞書的には [nɛ] [mɛ]（以上は広），[mo]（狭）なので，「中程度に口を開いた」の真意はわからない。英語版では e について red, men, met の例，o について for の例をあげて，そのように発音されると言っている。しかし，先述のように英語では e, o に広狭の区別はなくいずれも広いので，説明の真意として，狭い方ではなく広い方だと言っていると単純に理解することはできない。

以上のような事情のためか，他の解説書類での説明もばらばらである。しかし，古典学者の G. B. Pighi (1934, p.227, 231) は Roma, cena, stella などの例をあげて，イタリア語と違ってイタリア式のラテン語では e, o は常に広い音で言うとしている。イタリア語の発音辞典のひとつ DOP にも「アクセントがあれば」というただし書きつきで同様の説明がある[29]。音声学者 Camilli (1909) の説明もそこまでは同じだが，アクセントがない場合は「イタリア語のように」としているので，その場合は広くないと言っているのだろう。なお，現実の広狭の度合の多様性を踏まえ本稿ではこれを 7 段階に分けて分析をおこなうが，音声記号での書き分けは煩瑣になるので，以下あえてすべてを [e] [o] で統一する。

4.6 その他

イタリア語では有声子音の前にある s は有声になる (sb, sd, sg, sl, sm, sn, sr, sv)。この「**逆行同化による有声化**」の規則をラテン語にもあてはめると baptisma は [baptizma]［バプティズマ］となるだろう。さらにこれを，単語の間にあてはめると，たとえば“Agnus Dei” は [aɲuzdei]［アニュズデイ］のように言っておかしくないことになる[30]。

---

29) http://www.dizionario.rai.it/static.aspx?treeID=100&pg=2

30) 実際，イタリア語の辞書にはこのラテン語表現の発音として [z] を示すものと [s] を示すものがある。また，Camilla (1909)はラテン語の (Gallia est) omnis divisa...のイタリア式読みとして[ɔmniz divi:sɑ]を示している。

5. 実態調査

上記の問題点について，以下の３つのカテゴリーの録音資料を聞いて実態を検討した。網羅的な資料収集とは言えないが，市販音源のほか WEB 上で複数の検索語を使って検索し，候補として出てきたものをチェックした。音源一覧を稿末に示す。

5.1 資料

資料 A（聖歌）イタリアの聖歌隊 9 と個人 1 の歌唱による聖歌 Gloria と Credo（1904-2012 年録音）（**資料 A1**），および 21 司祭による歌唱ミサ（1999-2021 年録音）（**資料 A2**）。資料 A2 は録音音質が特によくないものが多いため，開祭の儀の Gloria の冒頭のみを分析対象とする。

資料 B（芸術的歌唱） ロマン派の時代のミサ曲でイタリア人による演奏が多いものとして，ベルディ作曲『レクイエム』の中の“Ingemisco”における 1910 年頃以降録音のイタリア人歌手（テノール）52 名による歌唱（**資料 B1**），およびプッチーニ作曲『グロリア・ミサ』の 8 団体による 2008 年以降の 10 演奏におけるイタリア人歌手（テノール・バス）14 名の歌唱（**資料 B2**）。

資料 C イタリア出身のローマ教皇 6 名と，教皇決定を宣言する枢機卿 4 名の声。内容の共通性を高めるため，教皇については“Urbi et Orbi”の祝福を中心にした。1903-1978 年の録音。

5.2 結果

5.2.1 単語間の音結合

子母音結合：ごくわずかな例外をのぞき，ひとつのフレーズ（途中に句読点や楽譜上の休符，音楽上の切れ目がないもの）の内部では子母音結合が生じている。たとえば“Gloria in__excelsis Deo. Et__in terra pax__hominibus...”の__部分はつないで言うので，カナ書きすれば［グローリア イネクチェルスシス デーオ エティンテッラ パク ソミニブス］。“Pater__omnipotens”は［パーテ ロムニポテンス］，“Et__ab__haedis”は［エタベーディス］のように言う。これはどの資料でも同じであり，イタリア式発音であるための必須条件と言えよう。

ただし，Credo の “factus est” や “ sepultus est” のように受動相・完了形を作る**「完了分詞＋est」**の間では，結合させず言い直す例がやや目立つ（資料 A1 で全 30 発音のうち 5 例，資料 B2 で全 30 発音のうち 2 例，他資料には該当箇所なし）。

Camilli (1909) が言うような子母音結合における子音の二重化（注 18 参照）は語末が s の場合は頻繁に生じるが，それ以外では多くない。この**語末が s の場合の二重子音化**とは，“gratias__agimus tibi”，“solus__Altissimus” を単に gratia-sagimus［グラツィア サジムス］や solu-saltissimus［ソル サルティッシムス］とつなぐのではなく，[s] を長くして（日本語で言えば促音を入れて）gratias-sagimus［グラツィアッサジムス］，solus-saltissimus［ソルッサルティッシムス］のように言うことである。資料 A1 では全 40 発音中に子音が二重化していると聞いた例 34 に対し単子音のままと聞いた例が 4，資料 B2 では 30 発音中 22 対 0，資料 C は 12 発音中 6 対 5（他は切っている例と不明瞭なため判断保留例：資料 B1 には該当箇所なし）。

それ以外での子母音結合における語末子音の二重化例は資料 A1 にはないが，資料 B1 で 3 箇所の “Et ab haedis” のうち最後（495 小節）で 1.4 秒前後の長めの音符が et にあてられている箇所では，二重子音化（促音挿入）した [et:a]［エッタ］に聞こえる例が全 52 発音中 36 と多い。しかし長さが 1 秒以下の他の 2 箇所では全 104 発音中 36 と減る。“Et ab haedis” は [ab:e]［(タ)ッペ］に聞こえる例が全 156 発音中 12 だが，音符が 0.2 秒程度と短い 482 小節では 52 発音のうち 2。このように語末子音の二重化例は非常にゆっくり発音するときに多く，速めだとすくない。音による違いもあり，“Inter oves” では r が複数回弾かれることはまれで，全 104 発音中 7。以上に世代差・地域差はなさそうである（資料 B2 では合唱・オーケストラと重なっていて判断困難のため除外）。資料 C では 3 名の “et auctoritate” のうち 2 名が二重化した [et:a]［エッタ］だった。

実は資料 B1 で語末に子音がない “ne perenni”（ne は 1 秒程度）で，後続の子音が二重化して [nep:e]［ネッペ］に聞こえる例が全 52 発音中 14 ある。そのことや先述の発音速度との関係も考え合わせると，子母音結合における二重子音化は，語末が s の場合以外は，ていねいに言う場合のひとつの発音法と考えることができるのではないかと思う。

単語間で同じ調音点・調音法を使う子音が続くときの二重子音化：これも頻繁に生じている。資料 A1 の “et terræ”, “resurrexit tertia”, “ad dexteram”, “descendit de” で計 40 発音中 37 が二重子音 [t:]に聞こえる。つまり［エッテッレ］［レズッレクスィッテルツィア］［アッデクステラム］［デシェンディッデ］のように，日本語で言えば促音化する。

ただし，**有声子音に無声子音がつづく場合**は二重子音化は頻繁ではない。“sed tu” で d に t がつづく場合は資料 B1 の 52 発音中 28 だけが [t:]［セットゥ］，“sub Pontio” で b に p がつづく場合は資料 A1 と B2 の合計 15 発音中 1 だけが明瞭な二重子音の [p:]［スッポンツィオ］（ただし A1 に判断保留 6）。“sed tu” は**支え母音**（主に[ə]）を挿入して言い直す例も 5 あった（［セッダトゥ］）。資料 C では教皇 1 名が調音点・調音法に関係なく単語間の子音連続に常に母音を挿入。

5.2.2 mihi の h の発音

資料 A1 は 5 団体・個人を集めえたのみで，うち 2 が [miki]［ミキ］（1965 年と 2018 年のもの），2 が有声の h 音を入れた [miɦi]［ミヒ］，1 が [mi:]［ミー］に聞こえる。資料 B1 では圧倒的に多いのは [mi:]［ミー］または [miɦi]［ミヒ］だった。曲中の 2 回の繰り返しで両方が聞かれることも少なくない。全 52 名の約 8 割にあたる 42 名がそのような発音で，残り 9 が [miki]，1 は [mibi] に聞こえた。[miki]［ミキ］の使用者 9 名は 1873~1940 年の生まれである。しかもその世代は全 21 名なので，その約半数にすぎない。[miki] は古風という Scherr (2010, p.87) の説を裏づける。他の資料には該当語なし。nihil については録音がすくなく，分析対象から除外した。

5.2.3 exce の発音

資料 A1 と A2 で Gloria 冒頭の先唱者（独唱）による excelsis を分析対象とした。結果として，exce 部分は資料 A1 の 10 団体・個人のうち 5 が [ektʃe]［エクチェ］で，あとは [ekstʃe]［エクスチェ］，[ettʃe]［エッチェ］，[ekʃe]［エクシェ］，[eɡʃe]［エグシェ］と判断保留が 1 ずつだった。

これは各団体・個人に複数の録音がある場合はその主流をとった数値だが，主流以外の発音として [egsʧe]［エグスチェ］，[eʃːe]［エッシェ］，[ekse]［エクセ］，[ese]［エセ］と聞こえるものもあった。このように，おどろくほどの多様性がある。資料 A2 の 21 のミサは音質がよくないのであいまいさを含む判断になるが，[ekstʃe] 1, [ektʃe] 4, [ektʃe~ettʃe] 5, [ettʃe~etʃe] 5, [eʃːe~eʃe] 3, [ektʃe~ekʃe] 1, [etʃe~eʃːe] 1, [ekʃe] 1 と聞いた。[ekʃe]［エクシェ］にしか聞こえない例は 1 だけだが，この司祭には別録音があり，そこでは [ektʃe]［エクチェ］と言っている[31)]。このことは [ekʃe]［エクシェ］が [ektʃe]［エクチェ］の崩れた発音であることを示唆する。

資料全体として多いのは [ektʃe]［エクチェ］で，[ettʃe~etʃe]［エ(ッ)チェ］がそれにつぐ。諸解説書が言う [ekʃe]［エクシェ］はほとんどない。文字どおりに読む [eksʧe]［エクスチェ］以外はすべてがその簡素化または崩れた発音と考えて矛盾は生じないだろう。

5.2.4 単語の内部で母音にはさまれた s と x の発音

どの資料でも母音間の s はほぼすべて有声の [z] になっている。例外は資料 C でローマとその近郊出身の教皇ピウス 12 世とカナーリ，フェリーチの 2 枢機卿。ただし，ローマ出身でもレオ 13 世は有声に聞こえる。オッタビアーニ枢機卿は標準イタリア語式に単語によって使い分けているようだ。このように一定の地域性はあるが[32)]，全般には [z] である。ただし，resurrexit, resurrectionem は s の前が接頭辞 re-になっていて語構成上の切れ目がある単語だが，この場合は資料 A1 の合計で [s] 5，[z] 12，判断保留 3 と，無声の [s] が少数派だが出てくる。なお，資料一覧に音源は示していないが，ギリシャ語である “Kyrie eleison” はほぼすべて無声の [s]。

母音間の x については，資料 A1 の crucifixus と resurrexit は 10 団体・個人のうち，音声不明瞭のため判断を保留した後者の 2 例以外，すべて無声の [ks] である。資料 B2 も同様。これに対し資料 B1 の exaudisti は，52 名のうち無声に聞こえたもの 25，有声の [gz] に聞こえたもの 24，判断保留 3 で，世代差や地域差はなさそうである。この結果は，exaudisti は同じ意味のイタリア語の esaudisti（s は有声）を想起させるために有声に引かれやすい例外で，基本は無声だと理解すればよいだろう。なお，crucifixus のイタリア語 crocifisso は無声，resurrexit は対応語なし。Scherr (2010, p.87) もイタリア語の対応語が有声の s ならラテン語の x も有声と言う。

5.2.5 母音字 e と o の広狭

感覚的な判断にならざるをえないが，中音域で発音されるいくつかの母音について開口度を -3（極狭）から+3（極広）までの 7 段階（中が 0）で判定した。結果として，どの資料でも全般に広い傾向が強く，明らかに狭く聞こえる発音はほとんどないことがわかった。古い**世代**には「極広」の発音が多いが，現役世代では減っている。そして，語末で**アクセント**がない場合は広さが抑えられることが多く，また，芸術的歌唱では**単語や歌詞の内容**による違いも見られる。

---

31) 稿末の音源一覧に示したミサの最後の２つ 。

32) イタリア語の地域性として母音間の s は北部では語によらず有声，ローマや南部は無声になる傾向が強い。

具体的には，芸術的歌唱で新旧にわたる発音者数が多い資料 B1 についてまず見ると，全般に広いが，アクセント母音（平均+1.9）に比べて語末の非アクセント母音（平均+1.3）はすこし広さが減少する[33)]。単語（の意味）による違いもあり，Deus（神）の e は非常に広いことが多い（平均+2.7）。また，古い世代の方が「極広」の母音の使用が多く，逆に「中」がすくない[34)]。そして，さまざまな内容の歌詞を含む資料 B2 では歌詞の内容による違いが見られ，受難を描く Crucifixsus の部分ではバス歌手の開口度の平均は +0.9 と「やや広」前後のものがほとんどだが，バス歌手でも祝福の Benedictus では平均+2.3 と，もっと広いものを多く使う。

資料 A1 の Gloria 冒頭の独唱“Gloria in excelsis Deo.”でも，アクセントのある o にくらべてアクセントのない o は狭い（平均+1.4 対-0.9）。独唱者の生年はわからないが，1936 年以前の録音のものはアクセントに関係なく広めである。資料 A2 は現代の録音であるためだろうが全般にあまり広くないが，アクセントのある o にくらべてアクセントのない o はやはり狭めになっている（+0.7 対-0.6）[35)]。資料 C は話者の世代が古いためだろうが全般にかなり広く，狭いものはすくない。アクセントによる使い分け傾向もやはりある。個人差もあり，「極広」はヨアンネス 23 世，ヨアンネス・パウルス 1 世，ドミニオーニ枢機卿に目立つ。

5.2.6 その他（非主流，ぞんざい，状況による，地域性があるなど，標準的と言いがたい発音）

・単語間の逆行同化による s の有声化：全体として有声化は少数派。資料 A1 で“excelsis Deo”, “Agnus Dei”, “Tu solus Dominus”, “cuius regni”の計 40 発音のうち s が [z] に聞こえる例が 12（アニュズ等），[s] が 21（アニュス等），判断保留 7 だった。資料 A2 の“excelsis Deo”は [z] が 6（...スィズ），[s] が 11（...スィス），判断保留 4 と，資料 A1 と同程度の割合である。資料 B1 では途中に音楽上のフレーズの切れ目を感じにくい場合の“vultus meus”, “preces meae”, “ab hoedis me”では，計 156 発音のうち [z] が 27（ヴルトゥズ等），[s] が 120（ヴルトゥス等），[ə] の挿入が 1，判断保留 8 で，世代差・地域差はなさそうである。資料 B2 の“Agnus Dei”では 12 名のうち [z] 3，[s] 9。資料 C でも“omnipotens Deus“や“Ioannis Baptistæ”などの s を [z] にする教皇がいる。

・単語間の逆行同化による調音点変化：音質がよくないことは考慮しないといけないが，資料 A1 で“unum deum”, “Spiritum Sanctume”などの m が [n] に聞こえる例が 40 発音中 22 あった。

・子音連続の回避傾向：単語間もふくめて子音が 3 つ連続する場合，ひとつが弱いか，なくなる傾向がある。資料 A1 については音質がよくないだけでなく合唱部分のためわかりにくいことを考慮しないといけないが，Sanctus は [k] を抜いた [santus]［サントゥス］に聞こえる例が 50

---

33) 開口度を便宜的に間隔尺度と見て計算した平均値だが，両者間の符号検定の結果，差は統計的有意 (p<.01)。

34) mihi に[k]を使う 1940 年までの生まれとそれ以降の生まれで分けると，8 語に対する開口度の使用数の分布は，広い方から順に上の世代（21 名）が 50, 85, 20, 13, 0, 0, 0，下の世代（31 名）が 39, 115, 47, 45, 2, 0, 0 だった。開口度が 0（中）より広いものについて残差分析をおこなうと，世代間で統計的有意差があるのは開口度が「極広」と「中」のものの使用率で (p<.01)，上の世代の方が「極広」が多く，「中」がすくない。

35) 資料 A1, A2 とも符号検定で統計的有意 (p<.01)。

発音中 16 ある。“Rex cælestis” については [rekstʃe]［レクスチェ］，[rektʃe]［レクチェ］，[rettʃe]［レッチェ］に聞こえる例がそれぞれ 4, 5, 1 例だった。expecto，ex patre，est cum, est per も [k] や [t] を抜いた [espekto]［エスペクト］，[espa:tre]［エスパートレ］，[eskum]［エスクム］，[esper]［エスペル］に聞こがちである。資料 B1 は独唱であるためかなり明瞭だが，dextra は 52 名中 31 名が [dekstra]［デクストラ］で，21 名が [destra]［デストラ］（イタリア語と同形）である。ただ，[destra] の 21 名のうち 14 名が 1940 年までの生まれであり（使用者はその世代の 64%，それ以降の世代では 23%），古い発音と言えそうである。先述の excelsis の [eksʃe]［エクスチェ］以外の発音（ [ekʃe]［エクシェ］を含む）もこうした子音連続を避ける傾向から生じるのだろう。以上の傾向は資料 C の教皇・枢機卿音声にもあるが，むしろ２子音の連続であっても間に支え母音を挿入して “ad vitam” を [adəvi:tam] のようにする発音が目立つ。語末でも m や n に支え母音をつけて Eminentissimum [eminentissimumə]［エミネンティッスィムマ］などと言いがちである。支え母音の挿入も，ていねいに言おうとするときのひとつの方法ではないかと思われる。

２子音の連続でもイタリア語にない組み合わせは，ひとつを省略するか二重子音させる現象もときに見られる。たとえば，資料 A1 の “et vitam” [evitam]［エヴィタム］，“et conglorificatur” [ek:o...]［エッコ...］ 。

・子音の長さ：資料 C でローマ出身の教皇に顕著だが，gratia を [grattsia]［グラッツィア］と [ts] の閉鎖が長く，descendat も [deʃ:endat]［デッシェンダト］と [ʃ] の摩擦が長いことがある。これはイタリア語の地域性の反映である（郡 2006）。資料 A1, B1 ではわかりにくいが，B2 の“Agnus Dei” では [ɲ] の長い [aɲ:us]~[aɲ:uz]［アンニュス(ズ)］が 12 名のうち 4 名いる（出身地不明）。

・その他：単語内での逆行同化による有声化は多く，資料 A1 の baptisma で [z] を使った［バプティズマ］が 10 発音のうち 8 ある。これに対し，無声化はすくない。資料 B1 の 52 名のうち absolvisti の下線部が文字どおりの [bs]［アブソ...］と聞こえるものが 41，逆行同化で無声化した [ps]［アプソ...］と聞こえるものが 4，順行同化した [bz]［アブゾ...］が 3，判断保留 4。

6 まとめ

カトリック教会で使われるラテン語の標準発音は，20 世紀初頭に教皇ピウス 10 世が「ローマで使われているもの」として典礼用に推奨したイタリア式の発音である。教皇はその具体的な内容を示さなかったが，ローマの教皇庁を中心にイタリア各地で多少の変種を包括しつつおこなわれていた発音を指すと考えるのが妥当と思われる。

イタリア式発音を主に音楽関係者向けに解説した英語や日本語の書籍類の説明は，19 世紀末からグレゴリオ聖歌の校訂をおこなって有名になったフランスのソレム修道院の発音解説を，多少のアレンジを加えつつ直接間接に引き継いだもののようである。しかし，ソレム修道院の解説にはイタリア式の実態とは異なる部分があり，イタリア風ではあっても厳密には「ソレム修道院式」と呼ぶべきものである。しかし，イタリア国外ではそれがそのまま権威あるイタリア式の解説と受け取られ，解説書も実際の発音をよく観察しないで書いたのではないだろうか。

20 世紀初頭から現在までのイタリア人によるラテン語の歌唱や発音を記録した資料を検討すると，母音 e と o で口の開きがきわめて広い発音が減ったことや，20 世紀初頭でも主流ではなかったが歌唱で一変種として使われていた作為的な mihi の [k] 音をほとんどやめたなどの変化も観察されるが，全体として発音は昔も今もほぼ同じである。

そして，解説書のほとんどに共通する excelsis と mihi についての説明（［エクシェルスィス］［ミキ］）は実際の発音の大勢（［エクチェルスィス］［ミー～ミヒ］）とは異なっている。また，そうした解説書には単語間の音結合の規則がまったく説明されていない。そのため，日本語やドイツ語を母語とする読者は，たとえば "Gloria in excelsis Deo. Et in terra pax hominibus..." なら［グローリア イン エクシェルスィス デーオ エト イン テッラ パクス オミニブス］のように単語の発音をそのまま並べればよいと思ってしまうが，それはイタリア式ではない。イタリア式なら［グローリア イネクチェルスィス デーオ エティンテッラ パク ソミニブス］のようになる。

また，母音 e と o は口の開きが広いものが全般に多いが，上述の世代差のほか，語末でアクセントがない場合の広さの抑制と，芸術的歌唱では単語や歌詞の内容による違いが見られた。

このほか，baptisma はふつう［バプティズマ］と言うような「逆行同化による音変化」があるが，単語間にまでそれを適用して "Agnus Dei" を［アニュズデイ］とする発音は少数派で，標準的と考える必要はなさそうだ。また，Sanctus を［サントゥス］のように [k] を抜く「子音連続の回避」もあるが，現代では一般的なものではないようだ。

文献・音源

研究書・論文等

Allen, W. Sidney (1978) *Vox Latina: A Guide to the Pronunciation of Classical Latin.* Cambridge University Press.

Brittain, Fred (1934) *Latin in Church: Episodes in the History of its Pronunciation Particularly in England.* Cambrige: University Press.（第 2 版 1955 年）

Camilli, Amerindo (1909) ɑ̃:kɛ:t (sɥit) lɑ pronuntʃa delle liŋgwe 'klɑssike in itɑ:ljɑ. *Le Maître Phonétique*, 24, 125-126.

Dubois, Louis (1922) *Le Plain-chant grégorien et la Prononciation romaine du latin.* Paris. http://archive.ccwatershed.org/media/pdfs/13/07/11/19-20-22_0.pdf

Eichenseer, Caelestis (1963) De pronuntiatu latino. *Palaestra Latina*, 181, 1-9.

Erasmus, Desiderius (1528) *De Recta Latini Graecique Sermonis Pronuntiatione.* Basel（等）

Green, Janet M. (2000) Queen Elizabeth I's Latin Reply to the Polish Ambassador. *The Sixteenth Century Journal*, 31(4), 987-1008. https://www.jstor.org/stable/2671184

Marouzeau, Jules (1943) *La Prononciation Du Latin (Histoire Théorie, Pratique)*(3 ed). Paris: Société D'édition « Les Belles Lettres »

Mocquereau, André (1927) *Le Nombre Musical Grégorien ou Rythmique Grégorienne.* Tome II. Paris: Desclée.

Pighi, Giovanni Battista (1934) La Pronunzia del Latino. *Aevum*, 8 (1), 215-233. 227, 231

Sabbadini, Remigio (1885) *Storia del Ciceronianismo e di Altre Questioni Letterarie nell'Età della Rinascenza.*Torino: Loescher.

Sabbadini, Remigio (1922) *Il Metodo degli Umanisti.* Firenze: Le Monnier.

Scherr, Vera U. G. (2010) *Handbuch der lateinischen Aussprache* (2 ed). Kassel: Bärenreiter.

Traina, Alfonso (1973) *L'alfabeto e la Pronunzia del Latino* (4 ed). Bologna: Pàtron.

Traina, Alfonso e Perini, Giorgio Bernardi (1998) *Propedeutica al Latino Universitario* (6 ed) . Bologna: Pàtron.

郡史郎(2006)「イタリア語の子音の長さとその地域差 ： 母音間の[ɲ][ʎ][ʃ][ts]を中心に」『Aula Nuova』（大阪外国語大学）5, 55-93. （本文 http://corismus.com/it/studi/conslung.pdf）

教会式発音の解説（出版社情報省略）

Copeman, H. (1996) in McGee, T.J. *Singing Early Music.* De Angelis, M. (1937) *The correct pronunciation of Latin according to Roman usage.* Goodchild, M.A. (1944) *Gregorian Chants for Church and School.* Green, A. et al. (1946 [1957]) *Complete Proper of The Mass.* Hines, R. S. (1975) *Singer's manual of Latin diction and phonetics.* May, W.V. et al. (1987) *Pronunciation Guide for Choral Literature.* Rossini, C. (1933) *'Proper' of the Mass for the entire Ecclesiastical Year.* (www.gregorianbooks.com/gregorian/pdf/CMAA/1933_Rossini_Propers.pdf) Silva, S. (2020) *Latin Pronunciations for Singers.* Suñol, G. (1930) *Text Book of Gregorian Chant According to the Solesmes Method.*
Liber Usualis 1920 年フランス語版 *Paroissien Romain.* (http://archive.ccwatershed.org/media/pdfs/13/07/17/15-06-29_0.pdf), 英語版 *The Liber Usualis.*（1934 年版 http://archive.ccwatershed.org/media/pdfs/12/07/06/17-07-32_0.pdf, 1961 年版 https://media.musicasacra.com/pdf/liberusualis.pdf）江澤増雄(2002)『教会ラテン語への招き』 小泉功(1959)『宗教音楽におけるラテン語の読み方』 聖歌集改訂委員会（編）(1966)『カトリック聖歌集』 高橋正平(1994)『レクイエム・ハンドブック』 日本合唱指揮者協会（編）(2013)『すぐに役立つ合唱ハンドブック』 三ヶ尻正(2011)『ミサ曲・ラテン語・教会音楽ハンドブック』 水嶋良雄(1966)『グレゴリオ聖歌』

分析用音源(インターネット上で収集したものについては URL の "http://" 部分を省略し, www.youtube.com にあるものは後半の "v=" 以降のみを記す：いずれも最終アクセスは 2021 年 3 月)

A1（聖歌）：Cantori Gregoriani "Messe gregoriane" (CD), Nova Schola Gregoriana "Messe Gregoriane" (CD), v=rkLSiR1QWLA, v=PtCWuG8e9k8, v=ZXT4ffBnr0U, gregorian-chant.ning.com/group/enregistrements/forum/topics/ にある以下の音源：coro-vallicelliano-di-roma-messa-de-angelis-in-canto-gregoriano-3, probandi-benedettini-di-s-giovanni-in-parma-messa-de-angelis-mess , coro-pueri-cantores-canto-ambrosiano-45-it-dischi-eco-1013-date-m , scuola-superiore-ambrosiana-milano-serie-a-canti-popolari-delle-m, schola-di-s-giorgio-maggiore-il-canto-gregoriano-ii-lp-it-lec-65-, 同じく 67-, associazione-italiana-s-cecilia-kyriale-simplex-vol-1-33-it-aisc-, coro-della-cappella-papale-di-san-francesco-d-assisi-in-caena-dom, le-congres-gregorien-de-1904, www.facebook.com/Coro-Popolare-Gregoriano-530580293678086/videos/qui-mihi-ministrat-communio-v-domenica-di-quaresima/1637703139632457/

A2（ミサ）：v=VKbzAONwfSs, v=Kwue5CilD8g, v=Xycy2NVqSj4, v=KGciFBwxTbo, v=GJao0_x4cDw, v=VjhkGezSYpM, v=Row7LRoAxLY, v=I9jwnRo4utI, v=rMprwtKXpRI, v=GANAAL3xcIQ, v=WfDjnip9qog, v=k9QjapFRJPs, v=_un5aQthoe4, v=8gELuDP6CUs, v=6EAunOb1kJI, v=Y9KTSkLIKLo, v=-2AhpRX8hXs, v=T5HTBb31XHw, v=16GtIxp8GJc, v=gk9iioWl_uc, v=__tnOCCnIfo, v=_J_yh52H2g8

B1 (Verdi): v=-jId9rUcndo, v=Et1P_7pCkyQ, v=w9pbly7pgkQ, v=51Y2bdBTY-Q, v=TuCh4SIgy78, v=ddI6jUhR_Xs, v=QPPHaTfe1oI, v=Ko2FHM2udTk, v=XszzZO5tQdk, v=WxGuC9MBWyU, v=R3jrKzHD1gI, v=ANah5FSFXdY, v=albTyg0qOBg, v=iL8v93XFv7E, v=TOGrErsqtJ8, v=BsAtz-j_TxI, v=D1_9vdUOvAw, v=wDGZNylhFd8, v=JP08Cwc7-84, v=Q435FEdvMp0, v=TC4GL7z3rFU, v=PmLUuxhRdDg, v=0O8hTlCCAF8, v=Rs4oRY30ymw, v=cHZVfwmlRuU, v=wJv3mcwR85Y, v=8DQg49G_Ows, v=D4Xg0d4GmHE, v=B_foIeeekXk, v=e9zHzIcz5ys, v=FVkAllKYqzg, v=oXfI9vFt8bw, v=5MtYeCzkIls, v=DsQ7vtjqMGQ, v=_Vq9ceqMPU4, v=8bRhPUcDvJg, v=Sql0LRnG3vA, v=-V4RfxrZLG4, v=fdVKcGluaVA, v=gM395qrAX8Q, v=yvfmYRVWZ0k, v=mpgFeoot0d0, v=RkmgLeXg7qE, v=7v7_Zvjk9y0, v=wcdTfvNNaF4, v=bh4EXbgewdc, v=mDORZudgwXM, v=V4HAc60LDg0, v=cr4H0jjwjvY, v=5ddpmgBeHAg, EMI 7243 5 65506 2 (CD), "Messa Da Requiem" Temirkanov, Orchestra del Teatro Regio di Parma (DVD, Major Entertainment)

B2 (Puccini): v=vD0t9_98S_U, v=YU9GVZ6l5Mc, v=6ImGt68jwks, v=n2zUm9MAqKw, v=d8HaYpEe6P4, v=h3-IAbckDs4, v=eBWWrFcXS1I, v=0zGNkHmEh0w, v=vAi6Ekdk4KA, v=fuzJhH6ryDI, v=QtNFwBb-8vw, v=f9Oh3LWo5pQ

C（教皇・枢機卿）：v=o9Pv-UuGUDM, v=J--y-F3ksCw, v=_2zkOPijQxg, v=XqO-GxaO-c0, v=ckKymKow9a4, v=jf87gZbPM8I; v=8n_vozQ_Iq4, v=m8V2l2b-UgI